



晩秋の原野と日高山脈

## 原野の歌

(絵と詩) 坂本直行

人影のない原野に  
人影をみいだし  
荒寥と寂漠の  
威圧から逃れて  
勇氣と愛着が  
僕をささえ  
透明な空を走る  
遠い山波の輝きが  
僕の熱情を  
無限の孤空につれ去る時  
原野は美しく  
僕の前に広がる

## 坂本直行さんを悼む

八 木 健 三

頑健そのものの坂本直行さん(なほゆき)(直行さんといわせていただく)が入院されたときいたとき、私たちは耳を疑った。「でも半年もすれば、また一緒にスキーに行けるよ……」

などと、ご本人も言っておられたのに、去る五月二日、とうとうスイ臓ガンで七十五歳の生涯を閉じられようとは。

直行さんは北大農学部を終えると、一九三〇年に十勝の原野に入り、三〇余年にわたって開墾の跡をふるうとともに、日高の山々を描きつづけ、豊かな自然を歌いあげてこられた。血のにじむような労苦も克服しての開拓生活は、直行さんらしいユーモアとペーソスをこめて、「開墾の記」や「雪原の足あと」に記されて、人びとの心を打つ。この生活の間に礎かれた明るく雄渾な夕

ツチの直行山岳画は、多くの人びとに感動を与え、一九七四年の「北海道文化賞」に輝やいた。

直行さんは心の底から自然を愛しつづけた。「自然保護はイデオロギーを超越した全世界的な課題だ」という持論のもとに、協会の創立以来の会員として、また理事や参与として、協会の発展に尽され、一流の反骨精神をもって、自然を守る戦列の先頭に立たれたことは感謝に堪えない。亡くられる数日前、大きな手で「八木さん、ガンバレよ」と握手された。その直行さんの最後のはげましに沿って、きびしさを加える状況のもとで一層自然保護につくしてゆきたい。

直行さん、さようなら。

(会長)